
異世界の姫と最後の烙印

ゼノリアル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界の姫と最後の烙印

【Nコード】

N6556X

【作者名】

ゼノリアル

【あらすじ】

ある日、大神 皇真おおがみ こうまは自分が昔殺した奴に似た少女に出会い異世界へ強制的に転移させられてしまう。
皇真は異世界でどうなるのか…
はたまた皇真の秘密とはいかに……

第零話〜プロローグ〜（前書き）

読んで頂ければ嬉しいです

第零話〜プロローグ〜

これは遙か昔の話。

昔、たくさんいる神様の中に狼の神様がいました。

狼の神様は、毛並みは艶やかで色は漆黒、その脚は世界を瞬きの速さで渡り、その爪は一振りですべてを切り裂いた。

狼の神様は、人間が好きで時々人の姿を取り町に遊びに行きました。

その姿は、黒髪に黒目だったそう。

ある日、神様は禁忌を置かした。

それは罪の無い人間を殺したのだ。

狼の神様に罰を与えるために降りてきた神様は狼の神様と仲のよかった竜の神様でした。

竜の神様の白く神々しい姿は誰もが見惚れるほどでした。

竜の神様は狼の神様を殺さなければいけません。

しかしできない竜の神様は別の世界へ狼の神様を送り竜の神様は涙を一滴流し、その涙から広大な森が出来たそう。

第二世界

オルトメアの神記

狼と竜の戯れより

第零話〜プロローグ〜（後書き）

読んで頂いてありがとうございます

第一話　俺の思い出と切っ掛け作った電波さん（前書き）

書きたいものかけるっていいですね

第一話 俺の思い出と切っ掛け作った電波さん

俺の名前は大神
おのがみ
皇真。
こうま

俺はいつもと変わらぬ道を歩いて下校していた。

歳は16の高校一年生だ。成績中の上、運動は中の中。至って普通の高校一年生だ

その帰り道に見てしまったのだ。

「あっ！？」

そして、**出会ってしまった。**

あいつに似た少女に……

刹那

思い出したくもない過去を思い出してしまった。

それは子供の頃の思い出。

忘れたいが忘れられない酷い思い出だった。

[illegible]

俺はいつも独りだった。

それは俺が忌み嫌われていたからだ。

近くには何もない山に囲まれた小さな田舎で、ここでは子供たちが遊べるような場所は二ヶ所しか無い。

それは山の中と小さな湖だった。
夏は湖で冬は山の中で一緒に遊び時には喧嘩し次の日には、決まっ
て仲直りをしていた。

だが俺には秘密があつた。
絶対に知られてはいけない秘密が……

そして、知られてしまった。

だから怖かった。

知られた事が……知ったことで俺が嫌われることが。
みんなに知られるのが怖かった。
そして俺はやってしまった。

あいつが俺の秘密を知り帰り際に言ったから。

「これを皆が知ればどんな顔をするだろうな、お前がまさかー
ーとー」だったなんてな。」あいつは笑う狂った様に腹を抱え
て醜悪な顔で。

許せなかったあんなに仲が良かったのに何故…
俺は泣いていた。怖かったから。

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い
怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い
怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い

そして

俺は気付いた頃にはそいつの喉笛を喰らっていた。

口の中はドロリとした液体でいっぱいだった。
この匂い、この味。

俺は気付く、取り返しのつかない事をしたのだと。

そして俺は泣きながらしわがれた声で、

「ああ、殺ってしまった。」

呟いた。

今にも潰れてしまいそうな小さな声で、

（これでいいんだ）

（多分大丈夫だから……）

（誰にも知らなれてはいないから……）

そこで俺の意識が途切れた。

気がつくところには家だった。

隣に目をやると父さんと母さんがいた。

父さんは、

「何があっただ？あそこで一体何があっただ！？」

母さんが、

「お前は倒れてたんだよ…それも血まみれで。」

そして気付くあいつの事が話に出てないことに…

だから俺は

「覚えてない…思い出せない………」と嘘を吐いたのだ…

生まれて初めて付いた嘘は生きた心地がしなかった。

そしてあいつは神隠しにあったと噂され二度と村に現れる事はなかった。

当たり前だ……

俺が喰い殺したのだから

そして俺は影で神隠しから逃れたとされ不気味がられ忌み嫌われた。

俺はこんなの望んでないのに……

||||||||||||||||||||||||||||||||||||

そして

話は冒頭に戻る。

俺は吐き気がしたあの頃の記憶を思い出したから…

でも、吐くのは我慢する。だって吐いたらカッコ悪いじゃんよ!!
そして、気付く。

（なっ何こいつ…！？）

だって明らかに服装が可笑しいから。

（いつの時代だよ）と思いながらも口には出さない
だって面倒事はごめん。

面倒はあれだけで十分だ。

（あつまた思い出したよ…うえ）

そして、銀髪に紅い眼で肌は透き通った様な白。
あいつに似てたのは顔の輪郭や体型だけだった。

（これって俺の早とちりだよな…）

そんな事を考えていると

あいつに似た少女が声をかけてきた。

「貴様を待っていたぞ。」

（はっ俺を待っていただと…）

うん…全く意味わかんね…）

「貴様には、我が世界オルトメアに行つて貰うぞ」

（はっマジわかんね。てか電波さんかよ…）

「準備は善いな。異論は認めん！！」

うわこいつ滅茶苦茶やん…

てか

「いやっ、準備出来てねえしてか異論認めろや！！」

「あゝ、もう無理だ。術式が発動したからな」男なら気合いで乗り
きれ、んじゃ行つてこい」

いや親指突き立て行ってこいじゃねえよ

思った瞬間視界が真っ白、俺の人生、お先真っ暗だよチクショウ。

そして俺はこの世界から姿を消した。

第一話　俺の思い出と切っ掛け作った電波さん（後書き）

読んでいただいております。

第二話、退屈な姫様とあり得ない俺（前書き）

頑張っ
て週一で
一話書く
予定です

第二話　退屈な姫様とあり得ない俺

ここはとある王宮の一室。

「暇じゃッ!!」

私は今王宮の自室に居た。私の名前はアリッサ・ウエル・ガルド。ガルド王国の第三王女だ。

私は、今物凄く暇である!!

「誰かつ、誰か居らんのか？」

しばらくしても返事がない

(うむ、誰も居らんのう)

「暇じゃな……そうじゃ、町に出てみようではないか」

私は思った。

(ただ町に降りるのはつまらんのう……)

私は考える、面白味がなければつまらないからな……

ニヤリ

「これよりわたしは此处を抜け出し町へ向かう!!」

(私が居ないとなれば王宮内は大騒ぎじゃな)

そうと決まれば

早速私は外套付きのローブを被り足元に魔方陣を展開させる。

「準備は出来た、では町へ行くとするか!」

私は魔方阵に魔力を注ぎ呪文を詠唱する。

『我は願う。風のような自由を、
 我の魔力を糧とし我の重みを解き
 放て』

そして最後に、ワード
詞を紡ぐ。

『ライド!』

すると私の体は空中に浮き、前に移動してちゃんと発動したか確かめる。

そして

「楽しい事はあるかう」

私は胸に期待を膨らませて町へ向かった。

[illegible]

此処は何処だろう……

見渡せば辺りは黒かった。
いや、これは闇だ。

自分の輪郭が解らない、手を動かしているのかすら見えない濃い闇だった。

すると突然、声がした。 汝の名は？
突然の声に驚く。 その声はまるで頭に直接話しかけられたような感覚だった。

もう一度声がする。

今一度問う。 汝の名は？

「おつ大神 皇真だ」

次はきちんと答えらた。

では今から幾つか問うことに答えよ

汝は罪人だな！？

(ツツツ！！)

(何故コイツは知っている！？)

いや、その前に

「お前は誰だ！！」

質問をしているのは我であって汝ではない、身の程を知れ！！

ゾクッ…

冷たいなにかが背中を走ったような感覚。

それは殺気、

(殺される…)

そんなことを思った。

まあよいでは時間があまり無いのでな此が最後だ
まだあるのかと冷や汗をかきながら思いつつ言葉を聞く。

汝は、一体何だ

（コイツは知っている！？）

（まさか…でも）

皇真はいろんな事を考えていた。この声の主が謎だらけだからだ。

もうよいそろそろ汝の意識が覚醒するのではな

「意識？

俺は寝ているのか！？」

そうだ。汝の夢に我が介入したに過ぎん！！

（おいおい、何こいつさらっと自分は凄いですよ宣言してんだよ…いやまあ凄いけどさ…）

ではまた会おう。今度は普通に会えることを願っているぞ。すると次第に辺りが明るくなり始めた。

そして

そうだ、汝に此をやろう。

そして激痛が右手を襲う。

「ぐっあっああああアアア」

すると右の手の甲に竜と狼が弧を描いたような刻印が現れる！！

「なんだよこれ」

まだ痛むが此を聞かずにはいられなかった。

ほう、まさか烙印を押されて無事とはな、しかもその刻印は貴様あいつの

何を言っているかわからなかったが声の主は最後に

精々楽しませてくれ

と笑いながら言っただけで消えたと同時に俺はそこからは覚えていない。

||||||||||||||||||||||||||||||||

俺は起きると右手を見た、そこには夢で見た物と同じものが刻まれていた。

「俺はいつたいていどうなってるんだよ。電波さんだけでもお断りつてのに…」

あゝめんどくせえ

そんな事考えていたがようやく自分が置かれている状況に気が付く。

（あれッ…ヤバくね！？）

それもそのはず。

俺は森の中に居たのだ。まだそれだけならいいのだが、辺りからは獣の雄叫びが聞こえて来ていた。

そして思い出したよ。

（あの電波さん、異世界とか言ってたな…オルトメアだっけ）

とか、もう頭の中グルグルで訳がわからん俺の後ろから音が聞こえる。

バキッ

その音に人間場馴れした速度で振り向く…

そこに居たものは、全身から炎がボウボウに出ているのに此方を涎を垂らして見ている熊だった。

ジュウウー！？

（ひい…涎で溶けるとかマジ勘弁）とりあえず、俺がとる行動はただ一つ…

ヒクマ
火熊に背を向けて…

「さいならあッ！！」

と同時に全速力で走る。

「グルアアアア！！」

三秒遅れて火熊もスタート、絶対あっちんが速いでしょとか思いつつ走る。

そして気付く、

俺は、足がそんなに速い訳ではない。

なのに俺はあり得ないスピードで走っていた。

「えええええ！！」

マジかよ。此がいわゆる、異世界補正？
「異世界サイコー」

とか叫んでいるといつの間にか森を抜けて大平原に俺は居た。

急停止。

ズザアア

「うわっ…半端ねえなコレ」

（急停止だけで三メートル必要とかどんだけだよ！！恐ろしいな異世界）

んで、此処何処よ！？

俺は辺りを見回す。

すると遠くに町が見えた。

（視界良好！！）

とりあえず町行けばなんとかなるだろ。

と軽い気持ちで町を目指すのであった。

第二話　退屈な姫様とあり得ない俺（後書き）

読んでいただいております

誤字や脱字があれば修正しますので教えてください

アドバイスなどもらえたら嬉しいです

出会い（前書き）

高校のテストがあつたので更新遅れました

どうもすみません

出会い

俺は今大平原を約一キロ先に見える町に向かって歩いてる。町の周りには高い壁が聳え立ち大きな門が正面に口を開いて立っており、門の前には鎧を着込んだ騎士？が槍を持って立っている、何やら他の騎士が門を通ろうとする者を停めている。たぶん荷物を調べているのだろう。

俺は門を通る為に並んでいる列へと並んだ。

中には馬車も並んでおり、一人また一人と町へ入りとうとう俺の番になった。

太陽は真上に昇っていた。

グウウ

「腹減ったなあ！？」

気付かないうちに俺の近くに一人の騎士が立っていた。

「ちよつと貴方、呑気な事言っただけ早く！」

ん？なんだ…

声の質は女だったがおかしい…

「あのかしませんでしたか？」

俺はなるべく丁寧を心掛けて喋る。

「えっああ…ごめんなさい、ちよつと待っててね。」

門を潜ると其処はいろいろな人で賑わっていた。

しかも、俺の世界じゃあ見れないものがいっぱい、何だか新鮮だつたりする。

見たこともない食べ物。

恐竜見たいな生き物。

そして、

（おおゝあれは!!）

俺の視線の先にはネコミミがピクピク尻尾がゆらゆら動いている獣人がいた。

「すげえ、こんななら異世界も悪くないな」

といろいろな事に気を取られて誰かにぶつかってしまった…

ぶつかった拍子に被っていた外套が取れた。

そこに居たのは、

年は13ぐらいで少し背が俺よりも低めの金髪碧眼の女の子だった。

容姿はかなりの美少女だ。

俺は右手を差し出して

「ごめん、大丈夫か？」

「大丈夫じゃ、何も問題はない…」

随分古風的だな…

しかし、こいつもあいつらと同じ反応だな。

そういえば、此処に来るまでにいろいろ人に見られていたような。

すると少女が

「おっお主は、まさか狼の神様か…」

…はい！？

「ごめん、意味がわからんてかお前誰！？」

「私は、アリッサだ。私は名乗ったのだからお前も名乗るもんじゃ無いかのう」

「ああ、悪い。俺は大神 皇真だ、皇真が名前な！！」

「コーマか、じゃが確かにコーマの髪は黒髪で目は黒目なんじゃがな…」

「そういえば、さつきもそんなこと言われたな…。いったい何「グウウ」だ」

アハハ、興奮し過ぎて忘れてたよ。てか、朝から何も食ってないからキツいな。

「なんじゃ。腹が減っておるのか…」

「仕方がないだろ、朝から何も食ってないんだから」

そっぴや、俺金持って無いじゃんっ！！。

「……食事でもしながら話すか？今なら金は私がですが…その代わり私がする質問に答えてくれるならじゃがな」

「マジ！！任せろ何でも答えてやるよ！」

おお、神様あんた居たとしたらいいやつだな！！

「早く食べよう!!」

「仕方がないのう」

何で溜め息つかれるんだ！？

それよりも今は飯だな

俺は先に歩き始めたアリッサを追いかける。

II

5分ぐらい歩いた所でアリッサは止まった。

たぶん此処が飲食店なのだろう。

よく見れば、肉の丸焼きが皿に載った板が看板だと思う。

（これならかなりそうだな…後は金だけだな）

そんなことを思いながら

ガツガツモグゴツクン

ツ
ツ
ツ
!
!

「お主、もう少しゆっくり食ったらどうじゃ…ほら、水じゃぞ」

パシッゴクゴクゴク

ふう〜

「水ありがとな」

「…それを言うのなら、もう少しよく噛んでだべたらどうなのじゃ？」

「悪い…腹が減ってたから」

「まあよい」

「それよりも聞きたい事って何だ!？」

「うむ…聞きたいことは二つじゃ」

「いったい何だろう？」

「まあいつか！」

「お主は、その烙印をみるに罪人なのじゃろう!？」

「ああ、これが…」

俺は右手の甲をみる。

（そつえば夢のあいつも言ってたな…

そつゆうことなのだろうか…）

「どうなのじゃ？」

でも俺は…

いや、言い逃れはやめよう

「そう…だ…。」

言ってしまった…

いやそもそもこれがあるじてんで俺の罪人だとばれてしまうのだろ
う…

「そうか…じゃがお主からは悪意は感じとれんのう。それにその刻
印も見たことがない」

……

「まあそれは今は、置いておこうでは、二つ目の最後の質問じゃ」

「お前は聞かないのか…？」

アリッサは数瞬目を丸くして突然腹を抱えて笑い出した

「クッハハハハ……聞いてどうなるのじゃ。いや、それより聞いて
欲しいのか」

俺は嬉しかった…

「アリッサは優しいんだな」

ポッ／／／

「なっにやにをいきにやり言つによじゃ…」

俺は久しぶりに心の底から笑った。

本当に笑えたのは、いつ以来だろう…

あの日以来俺は罪悪感のせいで笑えなくなっていた…だから余計嬉しかった。

また笑えたことが…

「アリッサは猫語を喋れるのか」

「うるさい／＼お前がいきなり変なこと言うからじゃ」
「変なことつてなんだ!？」

「それは…／＼それよりも最後の質問じゃ／＼」

話をそらしたな（笑）

まあいいか

「ああなんだ!？」

「あなた様は神様なのですか？」

「……は？」

「なんじゃ。違うのか？」

あつ戻った（口調が）

「当たり前だ…俺は普通の人間」

「なんじゃつまらんのう。」

「何でそんなこと聞くんだ？」

「それはな、お主が黒髪に黒目じゃからじゃ」

「それがどうかしたのか、いたって普通だろ」

少なくとも俺にとっては金髪のほうが珍しいと思うのに…

「馬鹿なのかッお主は馬鹿なのか…この世界で髪の色は魔力量を現すのじゃ、子供でも知っておるぞ…」

なにやら色順に黒↓赤↓青↓緑↓茶だそうだ。

そして、白、金、銀は何か特殊能力が在るらしいがそれは、個人別々らしい。

どれも鍛えれば魔力量は増えるらしい。

「だいたい分かったけど、神って言うのは…」

「ああ…それはnバンツ「此処に居たぞ」なんじゃ…」

そこには騎士が複数と女騎士と隊長がいて俺を見ていた。

はあゝ

いったいなんなんだ…？

出会い（後書き）

読んでくださってありがとうございます

これからも頑張って更新していきたいです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6556x/>

異世界の姫と最後の烙印

2011年10月20日02時15分発行